

てきた。

他方、知的な問題を感情的脳で扱うこともまた、同様に大きな苦痛を招く可能性がある。その解決を見出すには、厳格な、長々とした知的論理が必要とされるかもしれない。その問題についてのさらなる考えを阻止する「私はそれは嫌いなんだ！ ほっといてくれ！」という感情的反応を持つことは、なんの助けにもならない。主要な防衛機制の一つである合理化は、思考に干渉する感情の一般的な例である。それが干渉するのは、その感情が、感情的脳によって評価されるべき感情として認識されず、知的な思考と思い違いされるからである。

身体／本能的な問題もまた、他の脳によって間違つて扱われる可能性がある。極めつきの知的な人間としての私には、これは理解が困難で、一九七一年に私が日本の護身術である合気道を学び始めるまで、はつきりとはわからなかった。私の教師アラン・グロウは、長年にわたる合気道の修練と実力によって取得されねばならない名譽段位たる、黒帯の所持者であつた。アランは合気道について多くを語らなかつた。みずからの身体で実行し、実地教授を施すことによつて教えた。私は、初めはこれを少しも把握しなかつた。事実、二週間以内に、合気道の本質と哲学、その技の奥にある原則、そして他の靈的発達システムとの関係についての、言語による、見事な記述をすることができると私は見出した。が、私はあることにずっと注意を払い続けた。私自身は、かろうじてよろよろすることなく自力でマットを向こう側まで歩いて行くことができたのだが、これに反してアランは、手首のちよつとしたすばやい動きのように思われるもので、私を部屋の向こう側まで投げ飛ばすことができたのだ！

合気道は言葉ではないと絶えず注意されていたにもかかわらず、私は人生の他のほとんどの領域で

成功を収めてきたやり方——つまり、言葉と思考によるそれ——で合気道を習得しようとして、二年間を費やした。「左足をここに置き、右足をそこに置き、前進し、パンチが来る側に向きを変え、ラインから離れるという原則を忘れないようにし、背筋をまっすぐに伸ばし、意識が腹部に据えられるのを感じ、エネルギーが自分の前で流れ出ている様を思い描き、右手を挙げて回し、攻撃のエネルギーを思い描き、それと融合する」、などなど。

それはあまりうまくいかなかった。結局私は、正座し、言葉をほんのわずかしか、または全然出さずに、「自分の体で」技の実演を観察するやり方を発見した。私は全く新しい展望から学び始めた。今度は私の身体／本能的脳が私の体を扱い、それは私の知的脳よりもずっとそれがうまくいった。

また、身体／本能的脳が誤って他の脳の仕事を処理する可能性もある。自分の考えや感情を、結果におかまいなく行動に移す——たとえば、腹が立つ時はいつでも誰かのことをなぐる——人は悶着を起す。もう一つの例は心身症である。感情レベルで評価され扱われるべきであったものが、身体レベルに置き換えられるのである。

ある脳が他の脳の仕事を遂行することは、少なくとも自分が何をしているかをあなたが心得ている場合は必ずしも不適切ではない、ということに注意していただきたい。私の妻の看護業務においては、彼女はしばしば、患者に対する全面的に感情豊かな評価や反応を抑制しなければならない。これは、患者の生命を救うのに効果を発揮する反応は、感情によって損なわれてしまうであろう、高度に発達した知的で技術的な熟練を必要とするからである。鍵は、(1)三つの脳の相互作用を自動化した習慣と無意識的プロセスの上でなすがままにさせるよりはむしろ、自分が何をしているかを心得た上でそれを意図的に行うこと、(2)三つの脳全部の熟練した、バランスのとれた使い方を発達させること、

にある。たとえ話に照らせば、より高い、次なる進化の段階は、主人が馬と馬車と御者を自分の目的のために使う時にやって来る。

四つの道

三つの脳のうちの特にどれか一つの発達に専念することは、結果的に並外れた成長をもたらす可能性がある。グルジェフは、特にどれか一つの人間のタイプを主に扱うことに専念した霊的な道のことを「道」と述べた。これらの道のどれかにのっとって発達することは、必ずしも常にではないが、一般に、全く発達しないよりはましである。もちろん、あなたとはタイプの違う人間のために目論まされた道にあなたの努力を集中させることは、非常に非効率になりうるであろう。

第一の道は、インド文化におけるファキールによって代表される——また、多分、われわれの文化における選挙権をめざした運動選手のトレーニングにおいて時々アプローチされる——身体の道である。ファキール、 *Fakir* という用語は、ある種の乞食者や遊行する聖者を示すためにしばしば漠然と使われているが、グルジェフは、より厳密に、身体に対する並外れた支配力を発達させた人々について用いた。彼は、たとえば、インドで遭遇したあるファキールについて述べている。彼は、ある寺院の外で、数十年もの間、四つん這いになって指とつま先のみで支え続けたという。彼の身体はその位置で永久的に固定していたので、彼の弟子たちは、まるで彼が生命のない物体であるかのよう、川まで彼を運んで洗わなければならなかった。それはひどい運命のように思われ、そしてグルジェフは多分うなずくであろうが、しかしその行者が苦行に苦行を重ね、痛み、天候、見物人、自分

の希望や恐怖を無視し続け、さらにその姿勢を維持するよう自分自身に決意させるのに要した、信じがたいほどの意志と自制力について考えてみるとよい。

どの道も、それだけでは、見事ではあるがしかし無益な結果を生ずるかもしれない。ファキールは信じがたい意志を発達させるが、しかし何のために？ われわれは、並外れた狭隘化を代償にして、偏執狂的な発達、並外れた結果を得るのだ。けれども、もしそのようなファキールが、誰かの助けで、他の道のどれかを歩むよう仕向けられたら、身体への狂信的な献身を終わらせて、その意志力を自分の他の脳の発達に充てることができるかもしれない、とグルジェフは主張した。

第二の道は修道僧 monk の道、感情的、宗教的な道である。熱烈な祈り、信仰、献身、深い切望、忘我的な帰依がその鍵である。感情の働きは一般にかなり特殊化するが、きわめて強烈でなければならぬ。適切な感情は強められなければならない、好ましくない感情とは、それらが抑制されるまで闘われなければならない。こうした葛藤によって発達させられる感情的意志は、きわめて並外れたものになりうる。

ファキールたちは、一般に、自分が慕う個々のファキールたちから学ぶが、修道僧の道は、普通、組織されたスクール、宗教に帰依する人々であふれた修道院、で追求される。感情の強さが、うまくいけば感情的知性ととも、非常に高い程度まで発達させられる。強烈な感情は、グルジェフによれば、心霊的能力の発達を含むとつもない結果を可能にしうる、そういう駆動力、われわれのたとえ話の中の馬になるのである。

第一の道と同様に、その結果は非常にアンバランスで無益なものになり、「愚かな聖人」とグルジェフが名づけたもの——実際にはなんの助けにもならない「奇跡」を顕わさせる誰か——を生み出

す可能性がある。たとえば、人口過剰のせいではほとんどの人々がすでに苦しんだり飢えたりしている国で、祈りによって夫婦の不妊症を治す「聖人」を想像してみればよい。

第三の道はヨーギ *yogi* の道、諸々の変性意識状態を培うことによって知性および人間の状態への洞察を発達させる道である。すでに見たように、いくつかの変性意識状態においてのみ利用できる状態特定の知識が人間の十全な発達には不可欠であり、したがってさまざまの変性状態に入って聡明に機能する能力がどうしても必要になる。それらの状態に入ることができない人々には永遠に「秘密」のままに留まらざるをえない、人生についての本質的できわめて重大な物事をヨーギは知ることができる。

極端な場合、この道は「軟弱なヨーギ」——何がなされなければならないかは知っているが、しかし実際に多くを成し遂げるための動機づけおよび／または意志を持たない誰か——を生み出す可能性がある。大学教授である私は、いつもこの概念に特にドキッとさせられ（いささか脅えもする）。なぜなら私は、人生に対する見事な洞察（たとえばそれらが合意的意識にしか近づけないものであるとしても）を持っているのだが、しかし身体／本能的ならびに感情的な発達が欠けているために、まをしよう、そういう同僚たちに囲まれているからである。私はまた、あまりにも多くの日に、十全なる覚醒と発達のために何がなされるべきかについてのいかに多くの私の（抽象的な）知識が、それを実行するための私の動機づけや能力をはるかに追い越してしまいかを自分自身の中に見る。けれどもヨーギは、少なくとも彼の幅広い洞察が、感情のおよび身体／本能的次元で自分に何が欠けているかを彼が知ることを可能にさせるといって、ファキールや修道僧と比べて、なんらかの利点を持っているかもしれない。しかしながらヨーギが自分の知的脳を充分に発達させず、より低い達成で停まっ

てしまうと、彼は「軟弱なヨーギ」のままかもしれない。

グルジェフはフ、ア、キール、修道僧、ヨーギという言葉だけを独特のニュアンスで用いており、したがって上述の批評は、これらの言葉に関わる全てのシステムに必ずしも一般化されるべきではない。

グルジェフが描いた霊的発達の第四の道は、他の三つの道を結合し、三つの脳全てを、比較的同等に、かつ調和のとれた仕方では発達させることをめざす。これは明らかに、本質的にかつそれだけで望ましいことはもちろん、自己にとつての全く異なった種類の中心——たとえ話の中でわれわれが主人と呼んだ中心——を発達させるための舞台を設定する。第四の道のワークのさまざまの特徴は本書の残りの諸章で検討され、また、あえてそれと特定はしなかったが、いくつかについてはすでに述べられた。第十七章で論じられる自己観察の主要な課題の一つは、三つの脳の異なった「味わい（趣き）」、および一つの脳が他の脳の代りに行う間違つた仕事を個人的に観察することである。

【原注】

(1) これら三つの脳の解剖学および機能的な顕著な区別についての神経生理学的研究からのいくつかの現代的証拠はあるが、われわれの議論にとつて問題なのはそれらが有する観察可能な機能的特質である。私は脳 Brain という言葉を使い続けるが、しかし物理的な脳の解剖学的構造にはこだわらないでいただきたい。グルジェフは、時々、脳よりはむしろセンターという言葉を用い、また、その他のセンターおよびこれらのセンターのより細かな区分について語つたが、しかしそのレベルの詳細はここでのわれわれの関心事ではない。

(2) ウスベンスキーの「奇跡を求めて」*マヂ*を参照。

(3) われわれは、強烈な感情を意図的に発達させることが心靈能力を高めることを示す。超心理学におけるなんらの実験的データも持っていないが、しかし劇的で自発的な心靈体験は、普通、激しい感情を引き起こした悲劇的出来事と結びついている。拙著 *Psi: Studies of the Psychic Realm* (New York: Dutton, 1977) 「サイ・パワー」(工作舎)を参照のこと。

第十五章 偽りの人格と本質

本章は、われわれがこのパート2で検証した合意的トランスのさまざまな問題の簡潔な要約となるであろう。人格、偽りの人格、本質という概念をより詳しく検討してみることにしよう。

本書の序文で、私は、ワーズワースの「不滅の暗示」の最初の二詩句を使って、われわれの生きいきとしたエネルギーの喪失のことを、われわれがかつては見ていたのだが、しかし今はもう見る事ができない光の喪失として語った。ステイヴン・スペンダーの「私は真に偉大だった人々のことを絶えず思い出す」の最初の二詩節を引用して、そのテーマに戻ることにしよう。

私は真に偉大だった人々のことを絶えず思い出す。

終わることなく、歌いながら太陽が時を刻む光の回廊を通り、

子宮から出てきた魂の歴史を覚えていた人々のことを。

彼らの敬愛すべき野望とは、

なおも火に触れている彼らの唇が、

頭の天辺からつま先まで歌に包まれている。霊について告げることだ。

そして春の小枝から咲く花のように、彼らの身体をよぎる欲望を

胸におさめてきた人々のことを。

大切なことは、

われわれの地球より以前の世界にあつた岩々を通り抜けてきた

永遠の泉から汲み揚げられた血のこの上ない喜びを

決して忘れないことだ。

朝の純粹な光の中でのその喜びのことも、

莊重な黄昏時の愛へのその要求のことも

決して否定しないことだ。

往来がその騒音と埃で

靈スピリットの開花をじわじわ抑えてしまうことを

決して許さないことだ。

人格

人格 *Personality* の研究は、現代心理学の主要な専門領域の一つであり、——私は大学院の研修でそれを専攻した、——そしてほぼ誰にとつても魅力的な主題である。私は良い人格を持っているのだろうか、それとも悪い人格を持っているのだろうか？ 自分の人格を改善する講座を取るべきであろうか？

「人格」によつて普通われわれは、ある個人を特徴づけ、彼または彼女を他の人々から区別する、一組の耐久性のある、持続的な態度、特性、動機づけ、信念、および反応パターンを意味している。

人格という用語は、普通、日常的用法では自己（自分）と同義である。「ジョンは攻撃的だ」と「ジョンは攻撃的な人格を持っている」という言い方は互換的に使うことができる。内側からは、あなたの人格は、普通、自分の究極のアイデンティティとみなされる。たとえば、「私は、世の中の犯罪に反対であり、同情深く、ビジネスで成功すべく動機づけられており、憲法を信じ、危急の際に冷静に反応する人間である」。

われわれは、自分の人格が苦しみを引き起こすような特徴を持っている場合でさえ、それを尊重し、弁護し、それにしがみつく。われわれの人格のさまざまな特徴は確かにわれわれを苦しめへと仕向ける。たとえば、もしあなたの人格が「道徳的」であれば、誰かがあなたのことを「罪深い」とか「偽善的だ」として非難したら、あなたは深く傷つく可能性がある。ほとんどの人が苦にならないような状況で怖れを感じるといった、明らかに苦しみを生み出す人格特性は、人格という観念全体に異議を唱える現象としてではなく、もっと価値のある人格特性に取り替えることによつて正すべき特質とみなされる。事実、われわれは「強い」人格、非常に力強いまたは派手な特徴を備えた人々を評価する。ラジオやテレビでは、ショーのゲストは「パーソナリティ」として言及される。もしあなたがパーソナリティになれば、素晴らしいことではないだろうか？

何人かの人々の場合、彼らの人格の全構造があまりにも病理的なので、どうにかしてそれを壊して「正常な」人格に取り替えることができたなら、彼らはずっと幸せになれるだろう、と現代心理学は認識してきた。けれども、概して、心理学者たちは人格それ自体の望ましさを疑うことはない。

エッセンス 本質(偽りの)人格

他方、偉大な霊的伝統は、しばしば、人格を非難してきた。われわれの各々は、現在そうであるよりもはるかに根源的で重要な存在である（あるいは、ありうる）。人格がわれわれの生命エネルギーを消耗する、および／またはわれわれのより深い自己の発見、発達および顕現に能動的に干渉する程度まで、それは真の成長の敵なのである。

グルジェフは、この伝統的な二種類への区分を、本質（エッセンス）と偽りの人格間の葛藤として表現した。

本質とは独特な存在としてのあなたである。あなたは、物質的、生物的、精神的、感情的、および霊的な特性および潜在可能性の独特の組み合わせとして生まれた。こうしたもののほとんどは誕生時には潜在的であるにすぎず、あなたの世界によって、または後で人生においてあなた自身によって、ふさわしい環境が創り上げられないかぎり、決して現われることはないかもしれない。本質的な血（生命）の喜びや愛する能力といった、これらの潜在可能性のいくつかは、一般的な意味できわめて望ましいものである。なんらかの後の目標のために満足を延期することができないとか、あまりにも短気であるなど、もしそれらが発達すると厄介になるかもしれないものもある。これらの潜在可能性のいくつかは非常に一般的だが、それらが最後にどんな特定の形で現われるかはあなたの環境に左右されるかもしれない。他のものはきわめて特定のかもしれない。非常に特定の例を挙げれば、あなたは、数学や音楽の天賦の才を持っていたり、パニラの味にむかむかしたり、体操に必要とされる類の筋肉運動の協調と均衡への格別に高い身体／本能的知性を持っていたり、とても短気だったり、

赤ん坊を産むための肉体的潜在能力を持っていたりするかもしれない。

文化適応の過程と合意的トランスの性質を検証した際に詳しく論じた通り、あなたの親と文化は、あなたが生まれた瞬間からあなたの発達を形作り始める。あなたの本質エッセンスの一定の現れは報いられ、いくつかはただ無視され、いくつかは否定され罰せられる。この文化適応の過程は、その代理人たちがとつてもなく有能で見識があり、それに比べてあなたは無力で無知であるが故に、格別に強力である。それが強力なのは、あなたの身体的および感情の安寧が危うくなり、あなたが生来の社会的本能、所屬したい、「正常」でありたいという欲求ないし願望を持っているからである。

内側から見れば、成長することは混交的体験である。いくつかの点で、新しいことを学ぶこと、文化の知識や力を発見することは、素晴らしいことである。他のいくつかの点では、あなたはひどく傷つけられ、否認され、そしてあなたの本質的自己を否定しなければならぬ。たとえば、個人的な成長を遂げる過程で、私の妻は、大人たちによつて絶えず否認されていた彼女自身の知覚をとうとう放棄してしまった、紛れもない幼少期の出来事を思い出した。彼女は屈服し、彼らが真実だと言ったことをそのまま真実として受け容れることに決めたのである。たった一回の劇的な屈服というよりはむしろ、より一般的には一連の漸次的屈服という形ではあるが、われわれは皆この種の屈服を経験してきたのである。

われわれの本質的な自己の一つの側面が屈服するたびに、エネルギーが本質エッセンスから奪われ、発達中のわれわれの人格を養うことに向けられる。ここでは、ベルソナの元々の意味——俳優によつて用いられる仮面——が適切である。徐々にわれわれは、社会的に容認された自分自身の表現である、ますます包括的な仮面——われわれを仲間入りさせ、容認されるようにしてくれる何か、他のあらゆる人

たちと同じように自分を「正常」にしてくれる何か——を作り上げていく。その仮面、つまりは人格とますます完全に同一化し、自分が役割を演じていることを忘れて、役割になっていくにつれて、われわれの本来のエネルギーのますます多くが人格の中に入り、そして本質は萎んでいく。偽りの人格がより強力になるにつれ、偽りの人格それ自体が本質を窒息させ、それ自身の尊大な目的のために本質のエネルギーを使うように働くかもしれない。

われわれは、直接的な表現が許されていない自分の本質的性質のいくつかの側面を昇華させることによつて、それらを部分的に救い出すことができる。そうした側面の若干は、われわれの文化がそれらをたまたま尊重しているが故に、存続するかもしれない。われわれの本質の多くの側面については、それらのエネルギーはすつかり失われるか、または偽りの人格へと昇華されるかのどちらかである。われわれのあまりにも多くにとつて、本質のあまりにも多くは萎み去る。

合意的トランスという往来が、騒音と埃で、生きいきした霊の開花をじわじわと抑えてきたのである。

前掲(二七二頁)の例における本質の潜在可能性を思い出していただきたい。数学と音楽の天賦の才、パニラの味にむかむかすること、体操に必要とされる類の筋肉運動の協調と均衡への格別に高い身体/本能的知性、短気であること、赤ん坊を産むこと。この女性は、明らかに、数学と音楽を学び、体操チームに加わり、パニラ風味のする食べ物を食べないようにし、自分の気性をコントロールすべく努め、そして赤ん坊を産むべきである。しかし、われわれの文化の歴史のほとんどのを通じて、女性が大学に行き、数学を学び、あるいは体操の選手になるチャンスはどのくらいあっただろうか？

これは、なぜグルジェフが人格のことを偽りの人格と呼んだかを示す良い例である。ある一つの文

化は人々がどうあるべきかについてのそれ自体の考えを持ち、そしてこれらの考えは、ある一個人の独特の潜在可能性をほとんど気に留めないことがしばしばある。われわれの文化の歴史のほとんどの期間、われわれの例で挙げた女性は、数学や音楽は言うに及ばず、どのような教育もほとんどあるいは全く受けないであろうし、体を楽しそうに使って体操をすることなど間違いなく許されないだろうし、ましてその訓練を受けることなどなおのこと許されず、結局はたくさんの赤ん坊を産むことになるであろう——この特定の潜在的可能性を彼女が実際に好もうと好むまいと。彼女の短気な気性は、その一般的に厄介な特質は全く別にして、男性の支配を脅かすが故に、彼女を面倒に巻き込むであろう。若干だが幸運な人々がいる。彼らの本質の願望と才能の多くが、彼らの文化で求められているものと符合しているのである。が、われわれのほとんどにとって、性別にかかわらず、自分の本質の多くは否定される。

こうした否定がわれわれの人生をだめにする可能性がある。なぜなら、本質はわれわれの生命に関わる部分、真に生きている生命のきらめきだからである。それは、草原、木立、せせらぎ、大地、そして見なれたあらゆる光景の中に見出された光である。偽りの人格がわれわれの生命エネルギーのほぼ全てを使い果たしていくにつれて、光は薄れ、人生は一組の機械的で自動化した習慣と化し、生氣のない他の自動人形化した犠牲者たちの群れと一緒にわれわれを気の抜けたように動かし、さらにわれわれの抑鬱と空虚感を強める。グルジェフはそれを実に苛酷に言い表わし、通りすがりにあなたが見かける人々の多くは死んでいると述べた。本質がそのエネルギーのあまりにも多くを奪われ、偽りの人格があまりにも機械化し、自動化してしまったので、真の変化の望みがないのだ。これらの人々は機械的な物になり果て、機械的な人生を生き、機械的な死を死ぬべく運命づけられるのであ

る。

偽りの人格は死なねばならない

われわれは偽りの人格であるが、にもかかわらず……少なくとも、なにがしかの本質はまだ生きているし、まだ到達可能である。もしそうでなかったら、あなたは多分成長しようとはしないだろう。真の変化の望みがあるのだ。

本節は、偽りの人格の要点、その発達の仕方、それを維持する習慣と防衛についてであった。本当に変わるためには、偽りの人格が死ななければならぬ。が、冷酷で懲罰的な仕方でも、超自我の攻撃——それらもまた偽りの人格の一部に他ならない——によってでもなしに。偽りの人格の死は、トランスフォーメーション変容のプロセス、再生利用のプロセスであり、幅広い自己観察によって得られる知識に基づいた熟練したプロセスである。

もしあなたが突然自分の本質になることができたとしたら、それはしばらくは大きな解放になるであろうが、しかし結局はへとへとになるであろう。本質は幼少期の初めに成長をやめており、で、子どものまま成人の生活することは難しい。ゲルジェフは、うわさでは、未知の薬物と催眠の組み合わせを用いて、人を一時的に本質に戻すことによつて、このことを実証したと言われている。第九章で論じた催眠的年齢退行の現象を思い起こしてほしい。マリファナ中毒に関する私の研究でわかったことは、そのもつとも一般的な効果の一つは、子供っぽい、明け透けな気持になるという、薬物の魅力の明らかな一要素だということであった。けれども、永続的な結果を得るためには、われわ

これは本質を再発見し、それから、よりものわがりのいい親ならしたのであるように、それに滋養物を与え、それを愛し、大事に育てる必要がある。われわれは偽りの人格に生きているので、これを遂行するため、偽りの人格はその最良の資源を用いなければならない。

徐々に本質は成長し、今は偽りの人格によつて自動的に使われている資源、知識、および力を使い始めることができる。通常の、たとえば、二パーセントが本質で九十八パーセントが偽りの人格である代りに、ますます多くの本質へ、人生におけるますます多くの活力と本質的な喜びへ、そしてますますわずかの偽りの人格への漸進的移行を遂げることができる。これは、われわれが覚醒と呼んでいるより高次の意識の発達を伴う必要がある。すると、支配的で、自動化した支配の中心としての偽りの人格は「死ぬ」が、しかしその全ての技能と知識は、より高い意識レベルから使われるべき道具として利用することが可能となる。合意的トランスを維持することよりもはるかに重要な目標のため、今は偽りの人格と緊密な関係がある技能と知識をわれわれは必要とするのである。時にはわれわれは、現在の現実の中では否定的なものになっているわれわれの本質の特徴を——たとえそれらが真にわれわれのものであるとしても——正すために、これらの技能を必要とするのである。しかしながら、そのような本質の是正は、文化適応の中で起こる機械的で暴虐な本質の抑制や歪曲からではなく、まず本質を再活性化させた、より覚醒した状態からなされなければならない。

偽りの人格は死ななければならないという考えは、超自我がそれを取り上げて、あなたに対するさらなる機械的な攻撃のための燃料として使う時は、人を誤らせる。けれども、死という陰喩は別の意味できわめて的確である。なぜなら、完全な覚醒のために可能な（かつ、要求される）変化の大きさは、まさに死と再生のようだからである。実に多くの霊的伝統がいろいろな仕方ですべてきたよう

に、「汝らが幼子のごとくにならないかぎり……」。

本節のテーマは苛酷であった。これは必要だったのである。ありうべきわれわれに比して、われわれは元気がなく、トランス状態に陥っており、機械的で、条件づけられ、自動化している。不必要な愚かさや戦慄の世界を創り出して、それを積極的に維持している。光の回廊を通って来た魂の歴史を、われわれは忘れてしまったのだ。われわれが「靈」について告げる時、われわれの昏は、火に触れている代りに、冷やかである。が、光はわれわれの本性の一部であり、消え去ることはない。

完全な覚醒とはどのようなものか、個人的に体験していないので、私にはわからない。が、はるかに多くの個人的な体験から、深い眠りとはどのようなものかは確かに知っている。自分のもっとも深い眠り、もっとも深い合意的トランスが、比べると不快な夢のように思われるほどの、多くの光と喜びと英知をわれわれは見出すことができる、ということを私は知っている。

本書のパート3では、あなた自身の中の合意的トランスの諸問題を認識し、理解し始め、そしてなおいっそう重要なこととして、覚醒のプロセスを始めるためのいくつかのやり方を検討してみる。

【原注】

- (1) S. Spender, *Selected Poems of Stephen Spender* (New York: Random House, 1964).
- (2) ウスヘンスキー「奇蹟を求めて」pp. 251-253を参照。
- (3) C. Tart, *On Being Stoned: A Psychological Study of Marijuana Intoxication* (Palo Alto, Calif.: Science and Behavior Books, 1971).

パート3
実践